

# RAILWAY & CINEMA

今回は、一九七三年にハリウッドで作られた特異な鉄道アクション映画「北国の帝王」を紹介する。監督は、五〇年代から八〇年代初めまで「ヴェラクルス」や「飛べ！ フェニックス」など質の高いアクション・冒険映画や「何がジェーンに起こったか」のような異色スリラーを撮ってきたロバート・アルドリッチである。アルドリッチ監督の特色は、ハリウッドにしては珍しくアクの強い映画をずっと撮ってきたことにあるが、この映画は、ベトナム戦争中のアメリカで体制批判的なテーマを取り上げ新しい表現を試みたニューシネマの影響を受けたものだと思う。なお、冒頭、特異と述べたのは、このアルドリッチの特色に加え、「北国の帝王」は、無賃乗車常習者を描いた映画史上おそろくただ一つの映画だからである。

頃は、大不況だったなかの一九三〇年代前半。場所は、アメリカ・オレゴン州、ポートランドから中西部にかけてのパシフィック・ノースウエスト鉄道での物語である。無賃乗車を常習とする失業者であふれかえっているが、その中で、凄腕のA（エース）ナンバー・ワン（リー・マービン）、残酷な無賃乗車

## 鉄道と映画 — 18

爆走する蒸気機関車上で  
男と男の、死闘が始まる。

Emperor of the North

# 「北国の帝王」



文・羽生次郎

text by Jirou HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション（FC）への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

狩りの名人の車掌シャック（アーネスト・ボーグナイン）、名前を上げようとAナンバー・ワンに付きまといている調子が良いだけの若者シガレット（キース・キャラダイン）の三人が映画の主役である。Aナンバー・ワンがシャックの勤務する列車への無賃乗車を宣言したことから、失業者側の応援も加わり、両者の対立は異常なものとなってくる。ポートランドと往復するローカル線の貨物列車が両者の対決の場となる。シャックは、失業者や浮浪者が車のシャシーの下に隠れても追い詰める道具を使い、一方、Aナンバー・ワンは、一度下車を強いられても、再び乗ってくる根性を持っている。果たして、どちらが勝利するか。

鉄道映画は数あるが、無賃乗車がメインテーマとなっていることに先ず驚かされる。しかも、それが、かなりできの良いアクション映画に仕上がっていることにさらに感心させられる。このような映画を見ると、旧作のリメイクとSFXばかり重視する最近のハリウッド映画の質がいかに落ちていくか、痛感させられる。企画と脚本の良さに加え、何といってもリー・マービンとアーネスト・ボーグナインが上手い。個性の強い役者である二人の演技がかみ合い、対決を盛り上げていく演出も良い。しかしシガレット役のキース・キャラダインは、小狡さと軽薄さを出そうと努力しているが、その演技は平板と言わざるを得ない。

主役二人の演技と同じくらい魅力的なのが、初めから仕舞いまでほとんど出さずっぱりの、蒸気機関車が牽引する列車である。アメリカの中で、未だに使われているローカル線の線路に蒸気機関車を実際に走らせ撮ったものであると推察するが、ファーストシーンのかかなり長い時間のSLの走行シーンが大変美しく撮れているし、列車上での対決の場面も屋根の上とかシャシーの下とか、貨物車の中とか、普通お目にかからない場所を舞台に実写で撮っているところが魅力である。ローカル線という設定のため、機関車自体は小ぶりであるが、運転手、火夫、車長による運行ぶりもリアルに描かれており、鉄道映画として見ても及第点であると思う。

六〇年代後半から七〇年代前半にかけては、亡くなったロバート・アルトマン監督が言ったように、今よりはるかに重要な映画作品をアメリカが生み出した時代である。この映画は、その時代に生まれたひとつひねりした娯楽作品の秀作である。一見の価値がある。